

タイトル：2025 年度 中東☆イスラーム研究セミナー（第 26 回）

日時：2025 年 12 月 19 日（金）～21 日（日）

場所：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 3 階マルチメディア会議室（304）

「分断を越えるハンダラ：新聞風刺画にみる政治的図像の形成とその継承」

濱中麻梨菜（東京大学大学院）

今回の発表では、パレスチナ人風刺画家ナージー・アル＝アリー（1936–1987）によって創出された、パレスチナ人を象徴する図像キャラクター「ハンダラ」とその派生物（翻案）を取り上げ、ハンダラがいかに地域的枠組みを越えて、連帯のシンボルとして再解釈・再構成されているかについて検討した。ハンダラの派生形をめぐる展開に焦点を当てたのは、2023 年 10 月のガザ侵攻の発生以降、ハンダラがグローバルな抗議・連帯運動におけるアイコンとしてメディア横断的に登場し、パレスチナというローカルな文脈を超えて拡散されている状況を受けてのことであった。この内容は、自身の博士論文において、1960 年代から 1980 年代にかけてのナージー・アル＝アリーの作品群を分析した上でその現代的展開を辿る最終部分にあたる。

ハンダラの翻案について分析・検討する上で本発表が参照したのが、「アダプテーション (adaptation)」概念である。ハッチオン (2012) の定義に基づき、アダプテーションを「プロセスでありプロダクトでもある」と捉え、ハンダラが多様なメディアや社会運動の中で再配置される社会的文脈とその派生物の両方を分析対象とすることを試みた。アダプテーション理論は、特に日本においては、映画や舞台など限定的なジャンルにおける再解釈・二次創作を指すものとされてきたが、文学および文化研究における適用可能性を示したのがハッチオンである。これを受けて本研究では、風刺画という視覚メディアに対しても適用しうる分析概念の一つとして、アダプテーション概念を用いることを試みた。同時にそれは、西洋社会の作品を中心になされてきた風刺画を含む漫画／コミックス研究において新たに非西洋地域の事例を扱う試みであり、中東地域の事例と他地域の事例との比較を可能にすることにもつながると考えた。

一方で、それぞれが異なる社会的・政治的・文化的背景を抱える中で、もとは西洋社会において創出された古典をめぐる伝統を念頭に生み出されたアダプテーション概念をハンダラ事例に適用することの妥当性、また、政治的図像が普遍化される場合とされない場合との違いについて検証する際の研究視角の立て方についてセミナーにて指摘を受け、今後の課題として明確化された。パレスチナをめぐる急激な変化の中でその変化を捉えるべくハンダラの翻案事例に注目したが、やはりハンダラの派生物をめぐる議論は、博論において主眼とするアル＝アリーの風刺画分析を経た上で検討することでその意義がより明らかになると考えた。本研究セミナーへの参加によって、博論の筋道およびこれから自身が着手すべき課題が見出された。以上、簡単な感想ではあるが、改めて、この度の研究セミナーにご協力いただいた先生方、事務局の皆様、受講生の皆様に心より感謝申し上げる。